

韓国人日本語学習者の学習スタイル

— Kolbの学習スタイル尺度(LSI)からの検討 —

朴 志仙

1. はじめに

筆者は日本語を教えていた経験から、同じような教え方にも学習者の反応や学習成果が異なることに注目し、教師中心の教え方ではなく、学習者を中心にした教え方、つまり学習者の個人差を考慮した授業の必要性を考えるようになった。

言語学習において学習結果の個人差を決定する要因は「環境要因」、「授業要因」、「学習者要因」の三つの側面に大きくわけることができる。

中でも「学習者要因」の認知的要因の一つである学習スタイルは個人差が学習にどのような影響を及ぼしているかを解明する手段として注目を集めている。Peacock(2001)は、学習者の学習スタイルと教師のスタイルが異なると、学習がうまく進行しなかったり、フラストレーションが生じたりするという。

彼の指摘の通り、教師として自分の学生の学習スタイルを知ることは、自らの教え方を内省する上で役に立ち、また、より学生に合った授業、教室活動とは何かを知る上でも参考になる。

本研究では、学習スタイルを、個人の比較的安定した傾向であり、社会文化的、教育的影響を受ける概念として「外国語学習の際に好んで用いる認知活動、学習活動の様式・方法」(辰野,1989)と定義し、論議を進める。

2. 研究目的

Reid (1995)によると、学習スタイルは、学習者が新しい情報を取り入れる際に得意とする聴覚、視覚、触覚、運動などの知覚モードなどに関する「知覚性学習スタイル」と、学習者の性格や情意的特性による「性格性学習スタイル」、そして、得意とする認知的処理の傾向を表す「認知性学習スタイル」の三つに分類される。

しかし、外国語教育において韓国人学習者を対象にした先行研究は、数少ないうえに、主に知覚学

習スタイルを測ったものが多い。韓国人学習者の学習スタイルの研究には、より多面的な視点が必要であると判断される。特に、認知学習スタイルに重点をおいた研究は、学習というものが新しい学習情報を処理・保存し、活用するといった一連のプロセスであることから、重視すべきアプローチであると思われる。

中でも、欧米で広く認められているKolbの学習理論は、日本語教育においてほとんど活用されておらず、管見の限り、Kolbの尺度そのものを検討しているものは見当たらない。従って、本研究では、Kolb尺度の項目を使用し、韓国人日本語学習者の学習スタイルを調べることを目的とする。

3. 本研究の理論的な枠組み

Kolbの経験学習モデルはKolb(1984)の学習理論(Experiential Learning Theory)によるものである。

Kolbは学習者の学習スタイルを、認知的発達のもとの二つの軸である、情報の知覚(perceive)と情報の処理過程(process)の二つの次元から考慮した。それぞれの領域では両極的な性質を測定しており、情報の知覚においては具体性と抽象性が、情報の処理過程においては活動性と内省性がその両極になっている。

図1でみるように、上記の二つの領域は二つの軸になり、その両極になる4つの学習能力は循環的に起こる4段階の経験的学習のサイクルとして提示される。これによると、学習者は、具体的な場面で、ある経験をし、そこから得た概念に対して、より広い観点から観察や反省を行なった後、抽象的に概念化したり、一般化させたり、最後にそれを新たな場面で試したりすることによって検証や修正を行なう。

サイクルの各段階では異なる能力が求められるので理想的には4つの学習能力全てを持ち合わせて学習を推し進めていくのが好ましいが、人は普通いくつかの能力が他の能力よりすぐれているので、学

習能力には偏りがあることが多い。その偏り方に基づいて、開発した尺度が、The Learning Style Inventory 略して LSI である。(藤田,2002: 山川, 1997)

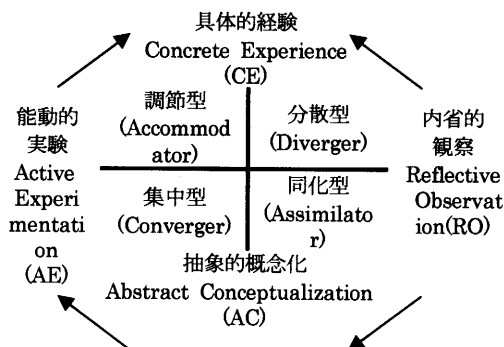


図1 Kolbの学習サイクルと学習スタイル

4. 研究方法

本研究では韓国の大学に所属する韓国人日本語学習者 131 名を対象に質問紙調査を行った。質問紙には、Kolb の学習理論に基づいて作成された尺度 LSI の項目を用いた。翻訳は、まず日本語を韓国語に訳したあと、バックトランスレーションを行い、等価性をみた。なお、翻訳による誤解を防ぐため、質問紙には各項目に英文を付けた。また、結果の妥当性を高めるため、強制的に順位をつけさせる順序尺度から 5 段階評価の間隔尺度に修正し、因子分析を行った。

5. 結果

因子分析の結果、韓国人学習者の学習スタイルは次のように 4 つの因子に分類された。

詳細を述べると、理性に基づいて論理的に考えを分析し、状況を知的に理解した上で慎重に取り組むことを表す「理性」因子、実際の学習場面において事前に考えたり、計画だてたりするのではなく、直接行動することで活発に学習することを表す「活動」因子、学習する際に、判断する前に注意深く観察することを表す項目によって説明される「実践的観察」因子、そして、学習する際に物事を理性によって考えるより、直感的に受け入れることを表す「直感」因子である。

これら 4 つの因子間の相関は、「理性」と「実践的観察」が正の相関を示しているに対して、「理性」と「直感」は弱い負の相関であった。Kolb の 4

つの学習能力と対応させるため 4 つの因子で分析を行なったが、項目が入れ混じっており、Kolb の 4 つの学習能力が明確に分かれることはなかった。また、第 4 因子までの累積寄与率は 38.15% に過ぎなかった。しかし、「理性」因子の中に「抽象的概念化(AC)」の項目が比較的まとまった形で現れたことから、「理性」因子は Kolb の「抽象的概念化」と比較的整合した項目であることが伺われた。

6. 考察

Kolb の「抽象的概念化」と本研究の「理性」因子は、ほかの因子に比べ、もっとも一致率が高かった。「抽象的概念化」の領域で物事は概念や理論を中心に抽象的に扱われ、社会・感情的な要素は否定されることがよくある。韓国では、外国語教育を含む高校までの教育が「入試中心」であることから、韓国人学習者が「教師主導」を好む傾向があることから(加賀美,2004)、外国語の学習においても、コミュニケーションな活動より、講義形式のような理解中心の教育内容が多く、理論や概念を中心として抽象的な学習を行なう傾向があるのではないかと考えられる。

一方、「理性」因子以外の三つの因子は Kolb の学習能力と整合しておらず、「理性」因子以外の因子からは、Kolb の想定する学習スタイルの存在が認められなかった。このことから、LSI 尺度そのものにおける限界や、韓国人学習者には Kolb の学習理論とは異なる学習スタイルが存在する可能性が伺われた。

7. 今後の課題

韓国人学習者の日本語学習スタイルをより明確にする必要がある。

本研究の調査結果は一般化できないことから、調査人数を増やし、対象者の属性や日本語学習者と非学習者による違いなど、学習スタイルに影響をもたらす関連要因について調べることにより、学習スタイルの本質を追及し、韓国人学習者の外国語学習スタイルを明確に把握する必要がある。

なお、韓国人学習者において LSI の有効性を検証するなど、LSI の普遍性へのさらなる検討が求められる。

参考文献

- 加賀美常美代(2004)「教育価値観の異文化間比較」『異文化間教育』19
- 藤田裕子(2002)「外国語学習スタイルに関する日本・韓国・中国共通の尺度作成の試み」『言語科学論集』6, 北大学大学院文学研究科言語科学専攻 pp.107-118
- 山川肖美 (1997) 「コルプ学習スタイル論の研究」『広島大学教育学部紀要』第一部, 教育学 46
- Kolb,D.A.(1984)Experiential Learning,Englewood Cliffs,NJ:Prentice Hall.

- Reid,J.(ed.)(1995)Learning Styles in the ESL/EFL Classroom. Boston:Heinle and Heinle
- Peacock,Matthew(2001) “Match or mismatch?Learning styles and teaching styles in EFL”International Journal of Applied Linguistics,Vol.11,No.1:1-20

ぱく ちそん／お茶の水女子大学大学院 国際日本学専攻
pakjisun@hotmail.com